

昨年12月26日のインド洋大津波発生以来、インドネシア、スリランカ、インド3カ国の被災地で救援活動とともにした9カ国のAMDA支部長と関係者が参加し、岡山市で国際救援シンポジウム（岡山から世界へ）（3月12日、県・公設国際貢献大学校主催）と「AMDA多国籍医師団復興支援会議」（同13日）が開かれた。

民族、宗教、そして文化の違いなど関係なし。苦勞をともにした者のみが共有できる、お互いの顔に信頼感にじみ出た家族のごとき再会だった。AMDA設立20年の風雪を感じさせる会合でもあった。現場における苦勞や人間ドラマの展開は活字を超えた世界だった。

カナダ支部からスリランカに派遣されたソーシャルワーカーのアンソニー・リチャー

ズはタミル人下移民だった。彼の故郷は東部にあるカルムナイという地区である。そこでは2000人以上の子どもが亡くなった。彼の肉親も6人以上が、そしてたくさんのおなじみが亡くなった。身寄りのない孤児が取り残された。

彼は提案した。孤児と子どもたちの後遺症改善のため、コミュニティセンターを建設し、運営することを。彼は「AMDAにはぜひともかわってほしい。自分も生涯をかけて関与していくつもりだ」と。そこから先は彼の目に涙があふれ、声が詰まった。

インドネシア支部長のタンラ教授からは未公開の映像が紹介された。亡くなった赤ちゃんを抱いて狂ったように泣き叫ぶ母親と、赤ちゃんの遺体が並べられた安置所であった。残酷すぎて、日本ではとてもテレビなどでの放映は不可能

復興支援に向けて

であろう。

タンラ教授はさりげなく主張した。「広島原爆投下では一瞬にして約14万人の生命が失われた。この地震・津波でインドネシアだけでも死者約13万人、不明者約9万人が出た。広島原爆と同じように悲惨な出来事だった」と。ちなみに、タンラ教授は広島大学の大学院で麻酔科の博士課程を修了している。

復興支援として各国から多様な提案がなされた。子供に関する現場での報告で感動したのは絵を描くことの意義だった。

最初は青色で津波にさらわれた父や母の姿を描く子が、4日、5日と描き続けると明るい色で太陽など夢を表現するようになる。それとともに人の顔を正面から見られるようになり、笑顔も見えるようになってくる。絵を描くことによりストレスを発散し、他人と悲しみを共有することが後遺症の改善に役立つ。

つ。AMDAとして日本を含めた10カ国間の子供の絵による交流プログラムを実施することを決定した。

保健医療支援及び心のケアを目的としたコミュニティセンターの建設運営は複数の国から提案があった。「悲しみを共有し、希望を失わずに夢を育む」ためには集いの場が不可欠である。その他にも津波で失われた貴重な医療従事者の人材育成も重要な視点である。AMDAはこの会議で決定された復興支援プロジェクトの実現に全力を挙げるとの予定である。

3月28日にはスマトラ島沖を再びマグニチュード8・7の地震が襲った。AMDAはただちに最大の被災地ニアス島に本部とインドネシア支部のスタッフを派遣し、緊急救援活動を実施している。3カ国の復興支援と併せ、皆様の温かいご理解とご支援を心からお願い申し上げます。

（アジア医師連絡協議会代表）

題字は筆者